

日本の伝統文化と現代アートの融合

——海田町旧千葉家住宅襖絵——

三桝 正典

(2016年10月11日 受理)

Fusion of Traditional Culture in Japan and the Modern Art

—— Fusuma Painting at Kaita-cho Old Chibashouse ——

Masanori MIMASU

Abstract

This paper introduces the production process on the theme of “Fusion of Japanese Traditional Culture and its Modern Art,” in which the author has been engaged. New paintings on “fusuma” or traditional Japanese sliding doors were produced and exhibited in September 2016 for the study of Chibakejutaku or the Chiba family house designated as an important cultural property in Kaita-cho in Hiroshima Prefecture. This paper aims at the creation of a new “beauty of Japan” through this production.

Keywords: fusion of traditional culture in Japan, modern art, Fusuma painting

はじめに

2016年、広島県海田町は、町制施行60年を迎え、9月にはその記念事業として海田町出身で日本人初のオリンピック金メダリストの織田幹雄氏の偉業と魅力に迫るシンポジウムや町民から提供された懐かしの写真展示、江戸時代中期～後期に建てられた住宅（旧千葉家・三宅家）で所蔵する屏風や掛け軸、画帖を公開した美術展示などが企画された。期間中海田町内外から多くの人が訪れ、幸いにも大きな震災から免れた街並みの過去から現在に至る海田町の魅力に触れていた。筆者も美術作家として、旧千葉家住宅の座敷棟の襖絵に関わらせていただく機会を得、「玄関の間」を舞台に、庭園に立つ「山桜」をモチーフとした新作襖絵を展示させていただいた。

本論文では、「日本の伝統文化と現代アートの融合」のテーマに沿って現在まで継続して筆者が制作している表現活動の経緯を紹介しながら、新作襖絵の作品と制作過程を通し表現の不思議さや面白さの一端に触れ、新たな「日本の美」への創造を目指したものである¹⁾。

日本の伝統文化と現代アートの融合

2012年より広島東区にある桜下亭を手掛けた作庭家の重森三玲の作品との出会いがきっかけで制作を始めた襖絵。その後、現在に至るまで様々な場所で展開してきた。「日本の伝統文化と現代アートの融合」。このタイトルは、2013年に尾道の爽籟軒・明喜庵の襖絵制作を進めていく過程で、現在尾道市立美術館学芸員の梅林信二さんから制作論の指針として示していただいたものである。その後このタイトルは自分の制作において重要な柱となって展開していくこととなった経緯がある。

折しも2015年は尾形光琳没後300忌、琳派誕生400年記念の年、日本国内の美術館や博物館では、多くの関連企画が催され、京都を中心として誕生したその様式美が見直され始めている。また2020年開催のオリンピックに日本（東京）が選ばれ、国際的にも日本の伝統的文化の一つとして注目を集めてもいる。

2015年9月。そのような状況の中、琳派誕生の地、京都で個展を企画開催していただいた。企画展のパンフレットには、以下の文章が添えられていた。

現代において「日本の美」を追求していくと、「日本の美」が生き生きと目に映る時代があります。「江戸時代」です。鎖国の中で豊かに「日本の美」が成熟したこの時代に視点を戻し、江戸時代に花開いた「日本の美」を現代へと繋いでいくことが新たな「日本の美」への創造へとつながっていくのではないか²⁾。

その新たな「日本の美」への創造の視点こそ、現在自分が目指しているものである。

日 本 の 美

2015年。京都を中心に日本各地で「琳派・RINPA」に関する展覧会が企画され、多く人々が日本文化史に大きなインパクトを残した琳派アートの世界とその魅力に触れた。更に2016年。江戸時代中期から後期に活躍した京都の絵師伊藤若冲、鈴木其一らの大規模な展覧会が開催され続けている。何故、今なお多くの人が琳派アートの世界に魅了され続けているのか。そこには、日本の伝統文化がもつ優雅さや絢爛豪華さ、永遠の斬新さがあり、明快な構成美は、現代

のデザインにも通じるものである。絵画だけでなく、襖、掛軸、屏風などの調度品や、茶碗、硯箱、団扇などの工芸品としても琳派アートは展開していて、今や日本の美の象徴ともなっている。

私も1998年頃から日本の伝統的文化のお寺や神社の建築空間でインスタレーションという現代アートの手法を用い、作品発表を展開した。その場所は、当時の私にとって最も魅力ある空間の一つとして強く感じたり惹きつけられたものであり、その魅力は今でも続いていて、現在の日本の伝統的な空間の襖絵制作へと繋がっている。

その「日本の美」がもつ魅力はいったいどういうものなのであろうか？

建築、衣装、食、生活、祭など様々な視点から見るができるが、大きく特徴付けられるのは二つ。一つは神社仏閣・城・茶室に見られる時代時代により確立された建築様式空間。もう一つは書道・茶道・華道・俳句・短歌・琴・三味線・日本舞踊・能・狂言・歌舞伎・浄瑠璃など宗教や思想を礎とした各流派と考える。いずれも長い歳月を経て今日まで大切に守られ、受け継がれてきている。そしてそれらの伝統文化は、時の流れと共に日本人固有の美意識である「日本の美」として形作られ、大きな魅力として私の感性に響いてくるのである。

旧千葉家住宅

海田町は、近世山陽道（西国街道）の宿場町として栄えた町であったが、旧千葉家住宅は、宿場の要の駅として職を務めた旧宅であった。本陣や脇本陣に準ずる施設として要人の休泊などにも使われた本住宅は、街道沿いに面して建ち、主家・角屋・座敷棟及び泉庭より構成されている。中でも江戸時代中期（安永3年1774年）に建てられた座敷棟は、同時期に造られた泉庭とともに、建築当初の統一感ある曲室空間の面影を今によく伝えており、書院が広島県重要文化財、泉庭が広島県名勝に指定されている。庭園については、築山や滝口には古い部分を残しながら、大きな立石をつくばいとして配するなど、優れた意匠がみられる。また千葉家には当時の役職や交友から様々な文書や貴重な書画・道具類が残されている。中でも本屋敷の4枚の水墨画の竹林を描いた襖絵は圧巻である。小説家の谷崎潤一郎は、作品「陰翳礼讃」の中で、日本座敷を一つの墨絵に喩えて以下のように述べている。

障子は墨色の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。私は、数寄を凝らした日本座敷の床の間を見る毎に、いかに日本人が陰翳の秘密を理解し、光と蔭のとの使い分けに巧妙であるかに感嘆する。なぜなら、そこにはこれと云う特別なしつらえがあるのではない。要するにただ清楚な木材と清楚な壁とを以てひとつの凹んだ空間を仕切り、そこへ引き入れられた光線が凹みのある此処彼処へ朦朧たる隈を生むようにする。にも拘わらず、われらは落懸のうしろや、花活の周囲や違い棚の

下などを填めている闇を眺めて、それが何でもない蔭であることを知りながらも、そこの空気だけがシーンと沈み切っているような、永劫不変の閑寂がその暗がりを領しているような感銘を受ける³⁾。

まさに、本座敷にはその感銘があり、墨画の襖絵がその閑寂を一層引き立てているのである。墨画の襖絵「竹林図（図1）」は、広島藩御用絵師山野俊峯斎（1784–1852）によって描かれたものであるが、その後京都の日本画家山崎宏堂（1880–？）が模写し、現在はその模写の襖絵が旧千葉家の本座敷に設えられ、一般公開されている。広島大学教授の菅村 亨は、山野の「竹林図」について以下のように述べている。



図1 「竹林図」山野俊峯斎 165.0×114.0 cm 紙本墨画淡彩 海田町蔵

「竹林図」は海田・千葉家の建物に設えられていた、もと襖絵で、これまでしなれていなかった大画面作品である。水蒸気をたっぷりと含んだ空気に包まれ、水辺の竹林が手前から奥へW字形に広がり、竹の中には濡れたような表情を見せるものもある。没骨描で墨の濃淡にメリハリを付け、たいへん情趣的な画面となっている。加納派というよりは四条派的な感覚に溢れており、俊峯斎の年齢的なものなのか、あるいは四条派の勢いが強まっていた当時の広島画壇の状況を反映しているものなのか、加納派の枠を超えた俊峯斎独自の感覚、新たな魅力を発見する作品である⁴⁾。

旧千葉家の座敷群には、谷崎潤一郎が表現した陰翳の「日本の美」が随所に存在し、その空間に襖絵を描く機会を得た時に、まず描こうとしたのは、山野俊峯斎同様の「墨絵」であり、山崎宏堂が辿ったと同様、「竹林図」を題材に選んだ。当時の千葉家から正面入り口に臨む山手には竹林が多く見られたのであろうか、山野が襖絵の題材に竹林を選んだのは定かではないが、現在の空間に竹林を描こうとしたときに何かの違和感を感じた。結局題材として選んだのは千葉家の泉庭の中心にそびえ立つ一本の「山桜」を選んだ。

山桜（ヤマサクラ）

桜は、絵画だけでなく古来から和歌にも数多く詠まれているなど最も日本を代表する花の一つである。桜には、しだれざくら、ひがんざくら、じゅうがつざくら、そめいよしの、けやまざくら、おおしまざくら、さとざくら、やまざくらなど日本には数多くの桜の品種が生息しているが、そめいよしのとやまざくらは桜の代表品種。牧野新植物図鑑では、やまざくら（図2）について以下のように記述してある。

1152. やまざくら

(*Prunus donarium* Sieb. var. *spontanea* Makino)

山桜は山中にはえる桜の意味。さくらの語源は不明。神話時代の歌の中の「さきくにさくらん、ほきくにさくらん」という語の中から出たものであるといわれる。桜桃を当てるのは誤り。ソメイヨシノとは花時に葉がのびること。葉花の各部が無毛のこと。蜜線が葉柄の上部にあること、がく筒が円柱形で下部がすらりと細いことなどの点で区別できる⁵⁾。



図2 やまざくら 牧野富太郎筆

記録による泉庭の完成は1774年とされていることからさかのぼると、樹齢約200年は越えると考えられる旧千葉家の山桜。他の桜の品種より開花が早いとされるために、開花は海田町にとってもいち早く春を知らせる印であると共に、色々な農作業の羅針盤ともなっていたと言われる。現在の泉庭における存在感とも合わせ、この「山桜」を千葉家住宅に吹き込むイメージで下絵から本画と作業を進めた。設置する場所は、玄関の間と次座敷。コの字型の襖12枚には、春の開花から散りゆく花卉の舞を、次座敷の4枚には、秋の紅葉をそれぞれ描き、両方の作品を合わせて題名を「山桜春秋」とした。

襖絵「山桜春秋」

1. 山桜（春）

桜を題材とした絵やデザインは、古くから絵や工芸品、織物などによく見られ、春の季節を代表するものである。その多くは、開花の場面が多い。開花は、その花の最も美しい瞬間であり、その色や形、香りに人間のみならず、自然界の様々な生きものが反応を示し始める瞬間で

もある。ただ、桜に関しては、満開の景色も美しさを感じるが、散りゆく様の景色は、満開と同様にむしろ一層その美しさに惹かれるものがある。私が桜を題材として描くときは、いつも花卉が散り空中に舞う様と散った花びらが地に落ち、自然に重なり作り出される文様のような様の2つのイメージを重ね、一枚の画面に描いている（図3）。桜を題材とした同様の襖絵は、今回で3作目（桜下亭茶室・広島 つじ華みざくらの間・京都）襖の枚数は、今まで制作してきた全ての襖絵の枚数の中では最も多い12枚。泉庭の桜の花弁が春風と共に舞い込んでいく様子を玄関の間のコの字の空間に表現した（図4）。

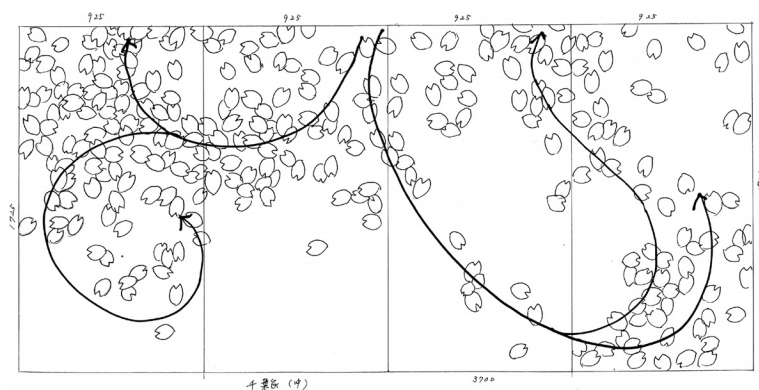


図3 山桜（春）下絵 12枚中4枚（風の流れ矢印）



図4 山桜（春）完成作品 12枚中4枚

2. 山桜（秋）

玄関の間と次座敷を仕切る襖4枚（春の裏面）に秋の桜を描いた。最初は、花と葉が同時にはえる山桜の性質を入れ、花卉が散ると同時に青々と夏に向けて育つ葉桜を描こうと考え、スケッチを進めていた（図5）。しかし、今回の旧千葉家襖絵公開の時期が秋の季節であることから、秋の桜を描いて欲しいとの希望があり、スケッチの葉桜に着彩をする方法で紅葉の桜を描いた。秋風がそっと吹き始め、紅葉した葉がなびくイメージにまとめたが、実際の秋の桜は、紅葉とともに落葉を迎え、葉少しずつ数を減らし、葉の向き新緑の時期と比べはやや下向きの様になる。しかし今回は、生き生きとはえる葉をベースとしたため、現実とは少し異なる表現となったが、爽やかな感じを秋の季節感として表現することに繋がった。4枚の構成は、スケッチの上部を左2枚に、下部を右側に本座敷の襖絵「竹林図」から受ける風のイメージに重ねるように仕上げた（図6）。



図5 山桜（安秋）下絵



図6 山桜（秋）完成作品

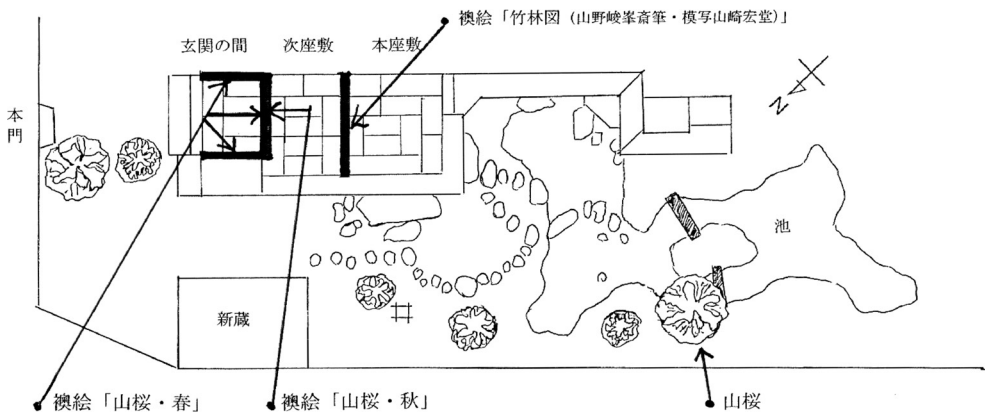


図7 旧千葉家平面図

ま と め

2012年より広島東区にある桜下亭を手掛けた作庭家の重森三玲の作品との出会いがきっかけで制作を始めた襖絵。その後、現在に至るまで京都の大徳寺瑞峯院の茶室をはじめ様々な場所で展開し、100枚を超える襖絵を描いてきた。制作テーマとしている「日本の伝統文化と現代アートの融合」は、2013年に尾道の爽籟軒・明喜庵の襖絵制作を進めていく過程で、現在尾道市立美術館学芸員の梅林信二さんから制作論の指針として示していただいたものである。

多くの人とのご縁とお陰で様々な日本の伝統的な建築と出会い、そこから感じる空間生成の原理や構成方法の研究を行う中で伝統文化を意識しながら作品を制作し、それらを合わせた展示空間の中に調和を見出すことを主眼に「新しい美」の創造を目指してきた。

今回の旧千葉家住宅の襖絵制作では、西洋との本質的な美の感覚の相違に目を配り、蔭や隅の中に日本的な美を見つめた谷崎潤一郎の文学作品「陰翳礼讃」のから「日本の美」の風景を見出しながら「新しい美」の創造を試みた。

特に注目したのは「光」。襖絵や屏風絵に用いられた金銀箔はもとより、工芸の螺鈿にしても浮世絵版画の雲母擦りにしても、自然の光を作品の中に捉え、時間や見る角度によってその輝きに変化を作っている。それはガラスや鏡など直接光を反射させ、輝かせるとのは異なり、谷崎の表現している陰翳の中に存在するわずかな光を捉え、内包する色彩と共に作品面に灯しているのである。谷崎は、暗がりのわずかな光の中で美しさを放つ金色について以下のように述べている。

私は黄金と云うものがあれほど沈痛な美しさを見せる時はないと思う。そして、その前を通り過ぎながら幾度も振り返って見直すことがあるが、正面から側面の方へ歩を移すに随って、金地の紙の表面がゆっくりと大きく底光する。決してちらちらと忙しい瞬きをせず、巨人が顔色を変えるように、きらり、と長い間を置いて光る。時とすると、たった今まで眠ったような鈍い反射をしていた梨地の金が、側面へ廻ると、燃え上がるように耀やいているのを発見して、こんなに暗い所でどうしてこれだけの光線を集めることが出来たのかと、不思議に思う⁶⁾。

描く襖絵には、たびたび金箔色を加え、谷崎の表現する美しさを私も目指してきたが、今回初めての試みとして、絵具に反射材を加えてみた。対象は山桜春の一枚一枚の花弁。光の強弱や見る角度によって、花びらに光の明暗が放たれ、輝き舞う様を作り出すことができた。作品公開時には、作品解説の時に入口の間の電燈の付け消しでその変化を見てもらったが、明りの有無による変化に多くの人が不思議を感じ驚きを見せていた。



図8 光の有無による画面の変化（山桜春）

今回の制作を通して、日本の伝統的な建築空間には、障子、欄間など光の加減を考えた様々な美が空間の中に自然に演出されていることをあらためて見つめることが出来た。それは、電光に溢れた現代社会において、日本人が大切に表現してきた美意識を思い起させるものでもあった。それらを現代アートの表現に取り入れ、書院や茶室、寺社などの伝統的な建築空間と共に展開していくことは、また新たな「日本の美」の創造に繋がるのではないかと感じた。

「試しに電燈を消してみる」⁷⁾

新しい視点のスイッチを起点に、引き続き制作展開して行きたい。



図9 山桜（春）



図10 山桜（秋）



図11 旧千葉家泉庭の山桜（中央）



図12 山桜（秋）解説風景

引用文献

- 1) 三桝正典 『日本の伝統文化と現代アートの融合』 三晃書房 2016 p. 3
- 2) 池田真知子 『ジャパニーズ・モダン 江戸から現代へ』 ギャラリー白川 2015 p. 2
- 3) 谷崎潤一郎 『陰翳礼讃』 中央公論新社 1975 pp. 34-35
- 4) 菅村 亨 『美術ひろしま2011-12』 「ひろしまが生んだ美術作家たち」 広島市未来都市創造財団 2012 pp. 90-91
- 5) 牧野富太郎 『牧野新日本植物図鑑』 北隆館 1961 p. 288
- 6) 上掲書 3) pp. 37-38
- 7) 同上書 p. 65

参考文献

三桝正典 『日本の伝統文化と現代アートの融合』 三晃書房 2016
 海田町パンフレット 『旧千葉家住宅 広島県指定重要文化財 広島県指定名勝』